

2019年3月25日

Vol.112



minmin

みみ
んん

「題字」谷川俊太郎さん
俊

特定非営利活動法人 せんだい・みやぎNPOセンター ニュースレター

目次

- P1…… 巻頭言 課題解決ツールを共創で生み出そう 理事 原 亮
- P2~3 理事対談 社会の変化とこれからのせんだいみやぎNPOセンター
- P4~5 各事業所からの報告
- P6…… 本部事務局からの報告
- P7…… 事務局日誌
- P8…… インフォメーション

巻頭言

課題解決ツールを共創で生み出そう

理 事 原 亮

昨年よりせんだい・みやぎNPOセンターの理事に就任しました原と申します。普段は、「共創」と「ソーシャルイノベーション」という二つの言葉を掲げ、地域での価値創出のお手伝いを全国で行なっています。

さて、近年、ICTやデジタルを活用できる環境が、社会全体で広がっています。地域の子育て環境を見える化するべく、地図のアプリを地域ママさんたちが自ら企画・制作をしたり、障がい者の方が3Dプリンタでほしい自助具を作ったり、そうした活動を促すコミュニティも増えています。課題の当事者や身近な支援者が、解決に必要なツールを自分たちで生み出せる時代です。

自分たちが解消したい課題や欲求、そして、その先の世界をどう描きたいのか。ICTを表現手段として獲得することで、できることは大きく広がります。

仙台や宮城でも、そうした活動を進められるよう、みなさまのご指導ご鞭撻を賜れば幸いです。



社会の変化とこれからのせんだい・みやぎNPOセンター

代表理事が代わり、新体制となってまもなく1年が経とうとしています。さまざまな社会の変化が起こっていく中でせんだい・みやぎNPOセンター、そして市民セクターがどのように社会の課題に向き合っていくか、当センターの理事3名が話し合いました。

土佐:3人体制になって何度か事業、職員採用のことで打ち合わせを行ったことはありますが、こうした対談は初めてです。当センターのこと、市民活動のこと、これから当センターがやるべきことなど、思うところをお話していきたいと思います。

●動く、そして育つ

渡邊:NPO法施行20周年を迎え、これまでの仙台を振り返ると“まちの諸課題を解決するための行動”を実際に行っている人は増えています。必ずしもNPO法人という形をとっているわけではありませんが、当センターを退職された方もまちの課題解決に取り組んでいたり、中間支援的な活動をされていたりします。これも人材育成の結果ですね。そのような人たちや団体と私達が率直に意見交換し連携した活動も必要だと思えます。



▲左から、渡邊代表理事、土佐代表理事、青木常務理事兼事務局長

土佐:人材育成も本来は、小学校高学年からしっかり教育して欲しいですね。中学、高校の社会の教科書にNPOという言葉が載っていますが、NPOで働く人も増えているのだから活動なども紹介して欲しいです。私達の人材育成もそこから手を付けたいと思っています。

青木:当センターの職員も切磋琢磨していかなければなりません。エンパワーメントをサポートしていくことも必要で

す。

土佐:仙台の市民活動促進を仙台市民活動サポートセンターだけでやっていくには無理があるのではないのでしょうか。

青木:例えば、支援施設の窓口で待ちの姿勢では、やはり現場との距離が生じてきてしまいます。事業で工夫しているところはありますが、情報収集力と人脈をつくることは大事です。官でも民でもある資源を活かし合うこと、サポートできる人材がNPOのネットワークとつながっていくこと、当センターとしては民設民営の自由度を活かせると思いいます。

渡邊:理事懇談会で理事の皆さんが言った『なぜ我々はこういうことをしているのか』に立ち返ると、20年前は自治を取り戻すことであり、そのための市民活動の推進であり、協働の推進でした。では、今後我々が目指すのは、自治がで

きるような地域をつくっていくということなのかなと。市民活動があればちゃんと自治ができるか。むしろ、自戒も含めて我々NPOは、行政の下請的な活動が増え、自ら決めて、自ら動くことが少なくなってきたとも思っています。だから、自治を創造していくことを、みんなで語ったりとか、アピールしていく必要はあると考えています。市民自治だから、市民が課題を定義し、解決に必要なコストを行政や市民が拠出するといった、新しい協働の仕組みづくりを目指していきたいです。しかし、現状は、行政に課題の定義も費用負担も頼っている。

地域で暮らし続けていくために必要なこと、解決しなくてはいけないことは何かを市民が定義し、解決策を考え行動していく。それに必要なお金は行政からも、たとえば企業や財団からも拠出してもらおう。行政が行いたいことを市民が行う市民参加から、市民が行いたいことに行政も参画する行政参加に出来たらと。市民やNPOが背負うのは仕様ではなく、目指すべき未来。だから、課題と一緒に背負えるのではないかと思います。

青木:当センターでは、サポート資源提供システムという民が支える民の仕組を地元企業の皆さんとノウハウや知恵を



集めてつくってきた経験があります。連携することによるスケールメリットを見出してきました。震災を経て変化してきたと思いますが、連携を促し関係を築いていくプロデュースする機能がどこかに必要でないかと感じています。

●背中を押して励まし続ける

渡邊: 若者などの新たな担い手がはじめた活動をどう支えていくのかにも興味があります。彼らがやってる小さいことや始まったばかりのことを応援したり、支援者になりそうな人をつないだり、活動の意味づけを行ったり。16年前、当センターの創始者である加藤哲夫さんが私に「君のやっている事は、若者の社会参画支援だね」と言葉をかけてくれ、あきらめかけていた背中を押してもらい、活動を続けて来れました。もしかすると、それこそが当センターの本当の姿だったのではと思っています。加藤哲夫さんが日本中でNPOや協働の意義を伝えただけではなく、ちょっとした活動の背中を押して、多くの担い手を励まし続けたことが今日につながっているのだろうと。私達は加藤哲夫さんと同じことはできないかもしれないけど、あらためてそこをやっていきたい。組織基盤強化や広報力強化といった「あるべき組織の姿」に近づけるための支援だけでなく、枠にはまらない支え方があると思います。

青木: あらかじめ想定したスケジュールにそってプログラムを進めてしまいがちなところがある。向き合っている人や組織との関わりの中から、その取り組みの意味や価値を見出して、伝え、発信し続けていくことは必要です。

渡邊: 原始的NPOというか市民活動というか、誰かが何かに気が付いて始めた活動とか、それが穏やかにでも始まったことをいっぱい見つけていく。

土佐: 私達が足で見つけ応援しなきゃダメだと思う。中間支

援団体には支援の型や枠を作ってはいけない。考え方やニーズが時代で変わるからです。課題が見つかったら、その課題に誰がどうやってコミットできるかを考えることの方がより大切だと思います。

青木: 始まりは「変わり者が何かやってる」と言われることでも、時間が経つとオセロがひっくり返るように価値が反転していくことがある。よく加藤哲夫さんも言っていましたね。

土佐: データの活用も重要ですね。データを分析することにより、その地域の課題が見えてくる。市民活動団体の中には上手く活用してる団体もある。

青木: 今の時代とこれからを読むということですね。

渡邊: 例えば人口減少ということも人口が減っていくってだけじゃなく働き手の変化がある訳ですよ。それこそ、定年が延長されて、町内会の担い手ももっと足りなくなるみたいに、可視化された課題を担う人がどうしても足りなくなってしまう。となると、現役世代やもっと若い層が担える社会を創る必要があります。現役世代の働き方を変えていたり、町内会が担っている機能を若い世代が参加しやすい仕組みをつくらせたり。

いずれにしても、市民社会を創造するためにはやらなくてはいけないこと、挑戦したいことが多く、せんだい・みやぎNPOセンターだけでは解決が難しいものばかりです。幸い私達にはフォロワー、支援する関係者、団体もある。まちの課題を解決する「関係者」を増やすためにも、各支援者が閉じないようにする、連携して行動するということですよ。私達が、まちや課題を開いて、参加しやすくする。役員、職員全員で「関係者」を増やしていきたいですね。

土佐: 会員は最大の協力者でフォロワーです。もっと会員との連携をしなくてははいけませんね。

(土佐 昭一郎)

各事業所からの報告

仙台市市民活動サポートセンター

マチノワ縁日

2018年8月25日(土)~27日(月)に「マチノワ縁日 明日をゆさぶる3日間」を開催しました。2018年初めの改装によって、情報発信と交流の場として機能を充実させたサポートセンター1階「マチノワひろば」がメイン会場。自らの興味関心からまちづくりの活動をはじめた方のストーリーを聞くトークイベント、市民活動や企業の社会貢献活動の紹介、肩書きも世代も超えた交流会など、緊急開催企画を含め11企画を実施。のべ446名にご参加いただきました。まちづくりを担う多様な主体が会うことで、それぞれが抱く「まち」への思いをゆさぶり、ご縁を結んで新たな一歩を踏み出すことを後押しすることが目的でした。実際に参加者の方から「こんな活動をしたいと思っているのだけど」とご相談いただくことが何度かあり、そのゆさぶられた思いを応援していきたいと思っています。

●はじめての〇〇、やってみました

サポートセンターの講座を受講した方が、実際に思いをカタチにしてイベントやブース出展を行う「はじめての〇〇、やってみました」には、2団体がチャレンジ。1団体はマチノワ縁日への参加で活動意欲がゆさぶられ、縁日前にもイベントを開催。もう1団体は「次は自分たちで規模を拡大して開催したい!」と、2019年3月にイベント開催することが決まりました。

●緊急開催!平成30年7月豪雨災害ボランティアと考える「これから、ここから、できること」

マチノワ縁日の準備を進めていた6月末から7月はじめにかけ、立て続けに大阪北部地震、西日本豪雨が発生しました。東北から遠く離れた西日本を襲った災害に対し、私たちは何ができるのか。きっと「何かしたい」と思っている方がいるはずだと、急遽企画をまとめました。

日本財団学生ボランティアセンターの「平成30年7月豪雨被災地への学生ボランティア派遣」に仙台から参加し、4泊5日の行程で広島県三原市でボランティア活動をおこな

った大学生3人から活動報告をしてもらい、参加者とともに「できること」を考えました。ボランティア参加のきっかけづくりやハードルを下げ、より多くの方に支援者となってもらうことは、サポートセンターの役割のひとつ。ボランティア経験者の「声」を届けることでアクションにつなげてもらえればと思います。

●市民ライターが「マチノワ縁日」をレポート! マチノワプレスセンター

サポートセンターと地元紙「河北新報社」が2014年から開催している、河北新報社のプロの記者を講師に迎え取材と執筆のノウハウを学ぶ「市民ライター講座」。講座修了生と連携して「書くこと」「伝えること」で市民活動やまちづくりを応援する「課外活動」も行っています。今回は、課外活動の一環として「マチノワ縁日」の情報発信拠点「マチノワプレスセンター」を設置し、各イベントを市民目線で取材し発信しました。記事はサポートセンターのブログ「サポセンブログ @仙台」でご覧いただけます。

(菅野 祥子)



▲マチノワ縁日のひとこま、「社会を変える」政治の使い方講座。講師の横尾俊成さんと参加者。

NPOの拠点を行政と協働運営

せんだい・みやぎNPOセンターでは、仙台市と多賀城市の市民活動サポートセンターの施設運営を行っています。施設ごとに実施した事業をお知らせします。

多賀城市市民活動サポートセンター

開館10周年記念「ゆるーくたのしくつながる場」

多賀城市市民活動サポートセンター(たがさぼ)は2018年6月で開館10周年を迎えました。2017年11月から2018年6月までに3つのプレ企画を行い、2018年7月22日(日)には本企画「うれしい・たのしいから見つける未来のカギ」を開催しました。

※プレ企画の様子はみんみんVol.111(2018年7月発行)をご覧ください。

●「あそび」から生まれる「つながり」

認定NPO法人ハンズオン埼玉理事の西川正さんによるゲストトークでは、「ゆるーくたのしく「あそび」と「つながり」を生み出す」をテーマにお話いただきました。西川さんは、道路でコタツに入ったり、大きなオセロで遊んだりする「路上遊び」、おとうさん同士が顔見知りになる「おとうさんのヤキモタイム」、地域の人たちが話す機会となる「トークフォークダンス」といった取り組みを行っており、その事例を紹介していただきました。これらの取り組みは、地域住民のつながりが薄れていく中で、気軽にあそびを通して人と人との関わりが生まれていくようにと行われています。

●出会いを体験「トークフォークダンス」

トークイベント参加者は実際に「トークフォークダンス」を体験しました。参加者が二重の輪になり、お題(今回は「昨日何をしていたか」「あなたの宝物」など)について内



▲トークフォークダンスの様子

側・外側の人それぞれ1分間ずつ話し、話し終えたら外側の人一つ席を移動するというものです。PTA行事として学校と地域、子どもと大人が対話する機会として活用されることが多いようです。参加者からも、ぜひ自分の地域で実践してみたいとの声もありました。

●多賀城で生まれたつながる場

多賀城で場づくりを行っている方のトークセッションも実施。「多賀城市国際交流協会」ジュニア部部長の内浦恵美子さんからはジュニア部が外国人だけでなく子どもの居場所にもなっていること、「高崎こども食堂らっこ広場」副代表の大友みどりさんには地域のさまざまな人たちの関わりによって場がつくられていること、「高橋東一区町内会」会長の金子昭夫さんからは日曜に朝ご飯をみんなで食べる会によって、食べる楽しみと会話や知り合いが増える楽しみが生まれていることをお話いただきました。

最後に今回のトークイベントを通して見つけた「うれしい・たのしいから見つける未来のカギ」を参加者に聞きました。「一人ひとりとの出会いを大切に」「やる側が楽しいと思える」「共感のきっかけ」といったカギが挙がりました。

●買って遊んでつながる

トークイベントとともに七夕雑貨市も開催。障がい者支援、フェアトレード、地域づくりなどに取り組む団体が出展し、来場者にNPOや社会課題を知ってもらいました。さまざまな雑貨やお菓子、ワークショップが並び、買うことも支援なんだということが体験できる企画となりました。

●たがさぼもつながる場の一つ

トークイベントには40名、七夕雑貨市には253名の参加があり、出会った人同士が一緒に活動するといった成果も生まれました。また、プレ企画・本企画で挙げたキーワードや関連する団体、たがさぼの10周年の歩みをまとめた冊子「ここから～もうひとつの多賀城ガイドブック～」を発行。この冊子も活用しながら、今後も「たがさぼ」は地域がつながる場として役割を果たしていきます。

(櫛田 洋一)

本部事務局からの報告

当センターが運営に関わる取り組みをご報告いたします。

名取発!子どもたちの取り組みが まちを盛り上げる

3月3日(日)、名取市市民活動支援センターにおいて、西松建設まちづくり基金「なとりこどもファンド2018活動報告会」が開催されました。2年目を迎えた「なとりこどもファンド」、小学生から高専生まで計8グループの事業が採択され、地域のゴミ拾い活動や子どもたちが楽しめる場づくり、地元の特産品を生かした商品開発などの活動に取り組みました。



▲ 参加者に書いてもらった、各団体への意見、感想や質問。もっと聞きたかったことや、励ましなどがたくさん出てきました。

報告会には、各グループのメンバーや関係者などが参加しました。まずそれぞれのグループが、取り組みの概要や成果・課題、また活動への参加やサポートの形で関わった方々の感想などを発表しました。パワーポイントによる発表が多い中、手づくりの壁新聞や取り組みで制作した物を見せたり、けん玉の実演もあつたりと、グループごとにさまざまな工夫が施されていました。後半は、参加者に書いてもらった質問や感想を読んだ上で、質問に対して返答するなど取り組みについてさらに詳しく話しました。

今年度の取り組みでは昨年度にも増して、自分たちや身のまわりの大人・先生だけで取り組みが完結するのではなく、地域の人たちや企業、農家、また学校の垣根を越えての連携も多く見られました。このようなつながりができてきたことも、それぞれのグループが得た経験とともに大きな成果となっています。(渡辺 剛)

「ニュースの種」を見つけ、育てる

2018年9月12日(水)にみやぎNPOプラザにて、Yahoo!基金主催の「知らせるカプロジェクト「書き手講座」」が開催されました。講師を藤代裕之さん(法政大学准教授・JCEJ=日本ジャーナリスト教育センター代表運営委員)、高宮舞さん(JCEJ運営委員)、青砥和希さん(一般社団法人未来の準備室理事長)が務め、県内外のNPOから午後の部に16名、夕方の部に9名が参加。当センターは広報や講座運営のサポートを担当しました。

今回は「ニュースの発見」をテーマに、ワークショップを行いました。まず3~4人のグループに分かれて、それぞれの身近で起こった「地域のニュース」の内容や伝えたいポイントなどを発表。そのあと、他の参加者のニュースを聞いて感じた「おもしろい」「驚いた」「自分も見てみたい」などのポイントを伝え合いました。ここでは、発信側の「伝えたい」と受け手側の「もっと聞きたい」のズレを体感することで、自分の驚きやワクワク感など自分の中から生まれる「ニュースの種」を、いかに「ニュース」に育てていくかを探りました。参加者からは「最近は何となく情報を発信してしまっていたけど、自分が伝えたいことをもっと大事にしたい」との感想も出るなど、情報発信の根本について考える機会になりました。(渡辺 剛)



事務局日誌 (2018年10月～2019年2月)

2018年

●10月

- 1・11日 NPO留学事前研修
- 3日 みやぎ広域支援団体連携担当者会議定例会議、三者会議
- 10日 仙台市環境局審議会部会
- 12日 岩沼サポセン相談日
- 15日 仙台市との四半期ミーティング
- 17日 多賀城市との3ヶ月会議
- 26日 仙台市協働まちづくり助成事業サポートチームケース会議
- 27日 岩沼サポセン相談日、宮城県こども食堂支援事業フォローアップ講座協力@仙台
- 28日 なとセンフォーラム
- 29日 宮城県情報公開審議会

●11月

- 1日 NPO法20周年記念フォーラムin東北
- 5日 全労災2018年地域貢献助成事業審査委員会
- 8日 みやぎ広域支援団体連携担当者会議定例会議、仙台市環境局審議会部会
- 9日 岩沼サポセン相談日
- 12日 宮城県民間公益活動促進委員会拠点部会
- 14日 宮城県情報公開審査会、仙台市市民協働事業提案制度検討会
- 15日 仙台市環境局審議会
- 21日 NPO法施行20周年フォーラム@東京
- 22～23日 市民セクター全国会議2018@東京
- 24日 岩沼サポセン相談日
- 25日 宮城県こども食堂支援事業フォローアップ講座協力@大崎
- 26日 第1回せんだい市民会議「新庁舎を考える」-市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウム
- 29日 (公財)浦上食品・食文化振興財団復興支援事業選考会
- 30日 平成30年度宮城県地域再生支援事業@東松島

●12月

- 3日 仙台市経営戦略会議
- 4日 三者会議
- 5日 第1回仙台市役所本庁舎立替基本計画検討委員会、みやぎ広域支援団体連携担当者会議定例会議
- 7日 宮城県共同募金会「みやぎチャレンジプロジェクト」決起会
- 10日 東北労働金庫助成事業選考会
- 14日 岩沼サポセン相談日
- 19日 平成30年度 協働まちづくり情報交換&よろず相談会協働まちづくり推進助成事業中間報告会
- 20日 日本財団助成事業監査
- 21日 平成30年度宮城県地域再生支援事業@石巻

- 22日 岩沼サポセン相談日
- 23日 第240回理事会&理事懇談会
- 27日 宮城県情報公開審査会
- 28日 仙台市環境局審議会部会

2019年

●1月

- 9日 みやぎ広域支援団体連携担当者会議定例会議
- 10日 仙台市経営戦略会議
- 12日 多賀城サポセン事務ブース審査会
- 13日 休眠預金等活用法のあり方を考えよう!
- 15日 仙台市との四半期ミーティング
- 16日 多賀城市との3ヶ月会議
- 17日 宮城県地域包括ケア推進協議会第4回コミュニティ・生活支援専門委員会、第2回仙台市役所本庁舎立替基本計画検討委員会
- 18日 防災円卓会議、(公財)浦上食品・食文化振興財団復興支援事業贈呈式、仙台市市民協働事業提案制度検討
- 22日 宮城県情報公開審査会
- 23日 仙台市協働まちづくり助成サポートチーム会議
- 24日 仙台市環境局審議会
- 25日 平成31年度緑の活動団体検討会議
- 27日 第2回仙台ラウンドテーブル「みんなの市役所を模索する」-市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウム

●2月

- 1日 NPO留学実施報告会
- 2～3日 BRANCH仙台「懐かしい写真展」
- 5日 第3回仙台市役所本庁舎立替基本計画検討委員会
- 6日 みやぎ広域支援団体連携担当者会議定例会議
- 8日 岩沼サポセン相談日
- 13日 絆力を活かした復興支援事業(調査・提案事業)検討委員会委員
- 14～15日 第34回民間NPO支援センター将来を展望する会(CEO会議)
- 15日 2018年度 NPO会計力向上キャンペーン総括フォーラム
- 15日 防災円卓会議
- 16日 2018年度下期みやぎ生協福祉活動助成審査会
- 20日 評議員会
- 21日 宮城県NPO等の絆力を活かした復興支援事業地域会議(気仙沼)
- 22日 みやぎボランティア総合センター運営委員会、宮城県情報公開審査会
- 24日 太白区みらいトーク
- 25～3/3日 BRANCH仙台「震災パネル展」

サポート・ご協力ありがとうございます

(2018年7月～2019年2月、敬称略)

【正会員・個人】 大橋年男、原亮、真壁さおり、上野和弘、中津涼子

【正会員・団体】 蔵王のブナと水を守る会

ご寄付ありがとうございます

(2018年7月～2019年2月、敬称略)

(株)日専連ライフサービス

岩沼に市民活動の新たな拠点がオープン 「いわぬま市民交流プラザ」

2017年度から岩沼市が多様な主体による協働のまちづくりと地域活性化を目的に建設を進めてきた「いわぬま市民交流プラザ」が2018年10月2日にオープンしました。前日に予定されていたオープニングセレモニーが台風24号の影響により翌日に延期され、1日遅れとなりました

が無事にオープン。施設の1階に当センターが運営支援を行っている「岩沼市市民活動サポートセンター」が入り、新しい市民活動支援の場となり、同じ1階には市民が自由に集える交流スペースと市民が起業する力を試すチャレンジショップスペースが4つ。2階には市民活動団体が利用できる貸室が設けられました。40名までが利用できる「多目的室」が2室。20名までが利用できる「交流室」が2室。集会所のない周辺の町内会の利用にも配慮され、地域にとっても待ちに待った施設です。岩沼駅から徒歩5分と市街地中心部にあり地域の方はもちろん、市外の市民活動団体も利用ができて仙南地区の市民活動、地域活性化の拠点になります。



▲いわぬま市民交流プラザ

が無事にオープン。施設の1階に当センターが運営支援を行っている「岩沼市市民活動サポートセンター」が入り、新しい市民活動支援の場となり、同じ1階には市民が自由に集える交流スペースと市民が起業する力を試すチャレンジショップスペースが4つ。2階には市民活動団体が利用できる貸室が設けられました。40名までが利用できる「多目的室」が2室。20名までが利用できる「交流室」が2室。集会所のない周辺の町内会の利用にも配慮され、地域にとっても待ちに待った施設です。岩沼駅から徒歩5分と市街地中心部にあり地域の方はもちろん、市外の市民活動団体も利用ができて仙南地区の市民活動、地域活性化の拠点になります。

(三浦 圭一)

連絡先

特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター
〒980-0803 仙台市青葉区国分町1-8-10 大和ビル4階
TEL:022-264-1281 FAX:022-264-1209
E-mail:minmin@minmin.org HP:https://www.minmin.org/

発行:特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター

代表理事:土佐昭一郎 渡邊一馬 編集部:せ・み広報チーム
発行日:2019年3月25日 デザイン:氏家朗



仙台駅から徒歩20～25分